



研究論文 (Articles)

体験者による「軽度の自傷行為」の意味付け

—青年期女性の語りの分析から

新井 素子

(東京大学大学院教育学研究科)

The meanings of minor self-injury from the subjective view of points:
Labovian narrative analysis of the story by female adolescents

ARAI Motoko

(Graduate School of Education, The University of Tokyo)

This study investigated the meanings behind acts of minor self-injury (for example, hair pulling, or picking at a wound) in Japan. By learning the meanings behind these actions, we can properly help the people engaging in minor self-injury. Four female adolescents who have engaged in minor self-injury were interviewed; the interview transcripts were analyzed using Labovian narrative analysis, focusing on their experiences as well as the attitudes of their parents toward their behaviors. The analysis revealed that there are many reasons behind why individuals engage in minor acts of self-injury; these reasons tend to be personal and reflect the individual's own life experiences. In the case of minor self-injury, some people attributed blame for the behavior to their parents. In some cases, alternative behaviors can be suggested which reduce the tendency to self-injure. In other situations, offering alternatives to self-injury may be inappropriate, indicating that further research is necessary to determine alternatives that may be successful. Additionally, adolescents are in the process of becoming independent from their parents. Simply telling them not to self-injure could cause them to interpret the activity as a symbol of independence; this could make individuals less willing to stop engaging in self-injury. Thus, from the perspective of support, it is important to carefully pay attention to their stories and their evaluations of self-injury. This study's findings provide new insights into why adolescents engage in minor self-injury as well as the attitudes of their parents.

本研究では、日本で軽度の自傷行為（例えば、瘡蓋取り）にどのような意味付けがなされるかを探索し、これを明らかにした。軽度の自傷行為の体験者である青年期の女性4名を対象者としてインタビューによりデータを収集した上で、親との関係性に着目してLabovの手法によりナラティブ分析をした。その結果軽度の自傷行為の意味付けは家族に関する経験を反映しており、親の叱責によりその行為が自傷行為だと自覚する場面があることが示唆された。自傷行為は代替手段により軽減する場面があると分かった。どのような代替手段が有効かを知るためには更なる研究が必要と推察された。青年期の者は自立の過程にあり、親が自傷行為を禁止することが行為に自立を象徴する意味付けを与え行為を止めにくくする可能性が考えられた。援助のためには行為者のストーリーや行為に対する意味付けを知ることが重要である。この研究により青年期の者が行為を行う意味付けや親の態度が意味付けに及ぼす影響が示唆された。

Key Words : The meanings, Miner self-injury, Experienced people, Female adolescents, Narrative analysis
キーワード：意味付け、軽度の自傷行為、体験者、青年期女性、ナラティブ分析

I 問題と目的

本研究は、瘡蓋取りなどの深刻度の小さい自傷行為（以下、「軽度の自傷行為」という。）にはどのような意味付けがなされるのかを知ると共に、行為の持続や休止に注目しながら、何がその意味付けに影響しているのかを探索する目的で、行為の体験者である青年期女性の語りを分析したものである。Favazza (1996/2009) は「自傷とは、自殺の意図なしに、非致死性の予測をもって、故意に自らの身体に対して直接的な損傷を加える行為であり、しばしば習慣的に繰り返される」と定義する。DSM-5はこの定義を基に、研究用の診断分類として非自殺的な自傷行為 (Nonsuicidal Self-Injury: NSSI) を提示する。他方、比較的多く準拠される他の定義では (Hawton, Rodham & Evans, 2006/2008), 過量服薬等も自傷行為に含むとするが、本研究では自傷行為と物質濫用を区別するため、Favazza (1996/2009 前出) の定義に従う。このように自傷行為の定義は統一されていないが、それは例えば慣習で認められたピアスは自傷行為でないとされるように、自傷行為の範囲が文化によって異なることが影響していると思われる (Favazza, 1996/2009 前出)。いずれの定義も、自殺企図は別として専ら外部からの観察が可能な面から行為を捉えようとしているが、行為の理解のためには、行為の客観面だけでなく行為者の主観面（意味付け）の理解も必要である。

自傷行為の意味付けについては、行為の目的を達成する手段の面（機能）を調査する研究とそれ以外の面も含めて探求するものがある。機能には、情動制御、対人操作、感覚探求等 (Klonsky, 2007)、ポジティブな状態の導入、対人操作、ストレス発散等がある (Taylor, Jomar, Dhingra, Forrester, Shahmalak & Dickson, 2018)。意味付けとして Rosenthal, Rinzler, Walsh & Klausner (1972) は、手首自傷は自己を再統合する努力であり行為者は出血や痛みの感覚、傷口を通じて内面を見つめることで自己の再統合を試みとする。他方、機能以外を含めているものに、意味付けとして「やめることができない大切なもの」を挙げる砂谷 (2012) がある。

しかしこの研究では、「大切なもの」が行為者にとっ

て何であるのかは明らかにしていない。行為者の主観的世界をより理解した援助のためには、「大切なもの」を具体化する必要がある。具体的な意味付けは、自傷行為の特徴に応じて異なる可能性がある。その特徴を知るには、行為の種類を意識することが有益であろう。自傷行為にはいくつかの下位分類があるが、例えば Lloyd-Richardson, Perrine, Dierker & Kelly (2007) は、行為の深刻さから「中・重度 (moderate/severe)」(自己切創等) と「軽度 (minor)」(瘡蓋取り等) に分ける。自傷行為はエスカレートしうるため (松本, 2015), 「軽度の自傷行為」が行為全体の起点になるだろう。行為の種類それぞれの意味付けの違いを考慮することが大切と思われるが、この点についての先行研究は存在しない。とりわけ、「軽度の自傷行為」については知見が乏しいため、本研究ではこれに注目してその意味付けを探索する。

軽度の自傷行為を意味付ける背景要因の可能性として、行為者の特徴を考察してみることができる。Walsh & Rosen (1988/2005) は、行為者には幼少期の両親との別離や虐待等の体験があり、衝動的な行動傾向があるとする。開始年齢には性差がなく、通常は青年期 (Pattison & Kahan, 1983), 日本でも平均 13.9 歳に開始されるため (山口・松本・近藤・小田原・竹内・小阪・澤田, 2004), 青年期の者を知ることは重要である。経験率の性差については、女性が多いとする研究と (Klonsky & Muehlenkamp, 2007), 性差はないとするものがある (山口ら, 2004 前出)。他方、自傷行為の企図は女性が持ちやすいとされる (Hawton et al., 2006/2008 前出)。

自傷行為が発症する青年期には、発達に伴い心身だけでなく対人関係も変化するので、背景要因としては対人関係も考慮する必要がある。青年期の者は親に服従する関係を組み替えて自立すると共に、友人関係や異性関係も発達する過程にある (白井, 2013)。このような過程が、親や友達との関係が自傷行為に関係することに (Wadman, Vostanis, Sayal, Majumder, Harroe, Clarke, Armstrong, & Townsend, 2018) 影響していると推察される。

本研究では青年期女性の語りに注目し、自傷行為の起点と思われる軽度の行為の意味付けを探索する。それと共に、家族など親密な者との対人関係が

自傷行為に及ぼす影響を検証することで、行為者の援助に役立つ知見を得ることとする。

II 研究方法

1 対象者の選定

対象者の募集は次のように行った。私立大学・大学院生の男女 251 名（男性 78 名，女性 173 名。18～26 歳）に対し，調査者が大学院生であることを明らかにした上で，心理学関連の授業時間中に「自傷質問紙」（岡田，2010）を実施すると共に面接協力者を募集した。協力を申し出た者には自傷行為についてお聞きすることを明示した上で，面接の意志を改めて確認した。その結果 22 名（女性 19 名，男性 3 名。18～24 歳）から面接の同意を得た。

2 データ収集方法及び倫理的配慮

面接協力者に対し半構造化インタビューを実施した。その際調査は任意であり調査途中でも自由に辞退できること，体調不良等が生じた場合には指導教員によるケアを受けることができることなどを説明した。質問項目は自傷質問紙に対する各人の回答を基に個別に作成した。具体的には行為の種類，頻度，その行為を選んだ理由，目的，状況（トリガー，時間帯，場所等），行為に至る経緯等を尋ねた。得られた音声データは逐語化した。

なお，本調査に当たっては筆者が所属していた大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。データ全体の分析結果は同大学でのポスターの掲示と口頭発表により協力者に開示した。

3 分析対象者の選定

本調査の結果 12 種類 102 例の行為が同定できた。具体的には，瘡蓋取り（20 例），ささくれ取り（18 例），引っ掻き（15 例），抜毛（14 例），噛む（7 例），ニ

キビ潰し，髪の毛の掻きむしり，自己切創（各 5 例），皮むき，つねる（各 4 例），頭をぶつける（3 例），自己殴打（2 例）だった。皮膚表面へ手指を用いて浅い傷をつける行為（瘡蓋取り，引っ掻き，皮むき）を軽度の自傷行為とし，その体験者で 20 代前半の女性 4 名を選んだ（表 1 参照）。いずれの者も精神的問題による通院歴はなく親など親密な者との対人関係について自発的な語りがある点が共通する。一方，行為の持続や休止の状況が異なるため（A さんと B さんは休止，C さんと D さんは持続），これら 4 名のデータを比較することにより，行為の持続等に家族などの親密な者との対人関係が及ぼす影響を知ることができると考えた。「これらの行為を始めたいきっかけはありますか？それはどのようなことでしょうか？」「以前はしていた行為を，最近ではやっていない理由をお聞かせ下さい。」という質問に対し，親等とのやり取りが多く語られたため，このやり取りに注目することとした。インタビューは 2017 年 6 月 2 日～10 月 3 日に実施した。インタビューの所要時間は 58～76 分だった。

4 分析方法

自傷行為の語り（ナラティブ）を分析した。意味付けは語りの文脈のなかで現れるが（能智，2011），語りの構造を簡潔な形で抽出したのが Labov & Waletzky（1997）である。発話からこの構造を取り出すことで，語り手が自らの経験について聞き手との間で創造したストーリー世界（storyworld）を知ることができる。特に，後述する「評価」の要素により，与えられた意味とその変化が分かる（Riessman, 1989）。そこには当然，聞き手との関係性や相互作用の影響が含まれるわけだが，インタビュー研究ではそれを全て排除することはできないし，ストーリー世界は元来，本人が孤独な主観のなかで作るものではなく対話的なプロセスのなかで創造される。今回もそうし

表 1 協力者

協力者	年齢	学生の別	行為の種類	行為の経緯
A さん	20 歳	大学生	瘡蓋取り	休止
B さん	21 歳	大学生	引っ掻き（頭皮，腕）	休止
C さん	24 歳	大学院生	皮むき（指先）	休止後再開
D さん	23 歳	大学院生	引っ掻き（首から下）	持続

た意味での「ストーリー世界」を想定する。

Labov (2013) はナラティブを**要約**、**方向性**、**複雑化**、**評価**、**解決**、**結び**という6個の要素で分類する。**要約**は何に関するものかを示し、論点をまとめたりナラティブが例示する一般的な主張を述べたりする。**方向性**は聴き手に対し時、場所、人、行動についての情報を示す。**複雑化**は物事を中心となる出来事の主要な説明であり単純な過去形で想起され、**方向性**や**評価**に細分化される場合もある。**評価**は問いに対する回答で相対的に重要な出来事を示すと共にナラティブの論点を際立たせるが、**解決**と融合することもあり、**方向性**の部分の置換が**評価**の機能を果たすこともある。**解決**は最終的に起こったことや、行動の重要性、意味付け、語り手の態度を示す。**結び**は現在形での語りに戻ったり他の語りに移ったりしうる。要素の順序は、①出来事の最初の報告（**要約**）、②時、場所、人、その行動についての情報（**方向性**）、③ナラティブの進行上重要な出来事や原因（**複雑化**）、④物語の進行の一時停止（**評価**）、⑤**解決**、⑥**結び**へと進み、最初に戻る（Labov & Waletzky, 1997 前出；Labov, 2013 前出）。最後に語り手の報告を反映する一連の出来事としてナラティブを再構築する。再構築では出来事を概略的につないで理解可能な因果の流れを作ることで（Labov, 2013 前出）、物語の機能を理解し更なる探求のための出発点を得る（Gibbs, 2017/2017）。Labov はナラティブを「過去の出来事の特別な並び方」で「時間的な連結」であると限定的に定義しつつも、解釈による連結も認める（Labov & Waletzky, 1997 前出）。本稿では連結が見出せたため特段の解釈はしなかった。具体的には、逐語化したデータから対人関係についてある

程度まとまったやり取りがなされた部分をトランスクリプトとして抜き出した上で、インタビュアーの発言と面接協力者の発言とを分け、面接協力者の発言には行番号を付してLabovの6個の要素に分類した。語り手の価値判断が表れている部分を**評価**、単純な過去形で示される部分を**複雑化**とした。過去形で示されていても物語の時間、場所、状況、参加者等に該当する部分は**方向性**とした（Gibbs, 2017/2017 前出）。文脈の断絶を避けるため**複雑化**は細分化せず、特に**評価**の要素に着目して語りを再構築した。

Ⅲ 結果と考察

どの行為者も軽度の自傷行為に複数の意味付けを見出していた。自傷行為を休止した者と持続する者とは語りの構造が異なり、前者は順序通りに要素が並ぶが、後者は順序が整わない傾向があった。このことから、行為を休止したAさんとBさんは自傷行為につき考えを整理できているが、持続するCさんとDさんは整理し切れていないと思われた。軽度の自傷行為の意味付けは各人の体験の違いを反映していたが、同じ行為に複数の意味付けが見出されるだけでなく、複数人に共通する意味付けがあることが判明した。語りの構造を表2に、Labovの要素による分類を表3～8に示す。トランスクリプト中<>内はインタビュアー（聴き手）の発言である。文頭の数字は行数、太字はLabovの分類名を示す。

1 語りの構造

各行為者の語りの構造は次の通りである。

表2 語りの構造一覧表

語り手	トランスクリプト	構造
Aさん	I	方向性→評価
	II	方向性→複雑化→方向性→複雑化→評価→解決→複雑化→評価→解決
Bさん	III	方向性→複雑化→評価→解決
	IV	方向性→複雑化→評価→解決
Cさん	V	要約→方向性→複雑化→評価→複雑化→評価→解決
	VI	要約→評価→解決→結び
Dさん	VII	方向性→評価→方向性→評価→解決
	VIII	方向性→評価→解決

どの行為者も自傷行為に対し複数の評価を与えているが、行為を休止した者（A, Bさん）と持続する者（C, Dさん）の語りの構造は違う。Aさん（トランスクリプトⅡ）とBさん（トランスクリプトⅢ・Ⅳ）は**方向性**→**複雑化**→**評価**→**解決**という整理された構造で語る。他方、CさんとDさんの語りは整理されていない。AさんとBさんは行為を止めることを通じて行為につき考えを整理できたが、他の2人はそうでないと思われる。もっとも、Cさんは一時行為を休止しており、**要約**を示して語るができているため（トランスクリプトⅤ・Ⅵ）、ある程度は考えをまとめていると推察する。他方、Dさんは休止した体験がないせいか、語りの中に**複雑化**がない（トランスクリプトⅦ・Ⅷ）。Dさんは**方向性**（自分の仮説）→**評価**（検証）を繰り返して自問自答しており、行為につき悩んでいると思われる。

2 Aさんのナラティブ

Aさんは瘡蓋取りをしており、その背景と休止が語られた。

(1) トランスクリプトと分析

表3 トランスクリプトⅠ

<p>方向性 <（瘡蓋を）取っちゃダメみたいな気持ちって、どれ位あるのかな？></p> <p>1 …母親に、止めなさいって言われて。「ああ、止めなさいって言われるなあ」って</p> <p>2 いうのがちょっと。<ああお母さんに言われるなあっていうのがちょっと>はい。</p> <p>3 評価 <そのことが引っかかる？> 引っかかるレベルで。私はそんな…肌のこと</p> <p>4 は、痛くなければ良い位のレベルで。ふふふ…</p>

Aさんは瘡蓋取りに対して、母親に「止めなさいって言われるなあ」と（**方向性**, 1行目）「引っかかるレベル」で気にする（**評価**, 3行目）。Aさん自身は瘡蓋取りを「痛くなければ良い位のレベル」と笑いつつ語っており（**評価**, 4行目）、Aさんは母親が禁じなければ瘡蓋取りを許容されない自傷行為とは認識しなかったと思われる。

表4 トランスクリプトⅡ

<p>方向性 <瘡蓋（取り）はちっちゃい時からってことで、痒いっていうのがメインだったのか、面白半分だったのか、そういうの覚えてる？最初にやったとき。></p> <p>5 複雑化 ああ…最初やった時は…面白かったです。あの、ピリピリ…っていうのが。</p> <p>6 日焼けして。</p> <p>7 方向性 私は日焼けしても皮膚がピリピリ…ってならないタイプなんで。<うらやましいうような…>完全に真黒になる方で。痛くもならないので。</p> <p>9 複雑化 だから、人のあの、むいて。<はいはい。私はむいてもらう方だなー。</p> <p>10 背中とか？>背中とか。お父さんの背中、ピリピリピリ…ってむきました。<そうなんだ、そんなん楽しいなっていうのがちょっとあるなあってことかな。></p> <p>11 評価 小学校の頃は特にそうでした。<何で止めたの？></p> <p>12 解決 何か…そんなことよりも楽しいことが他にあるなあって。<いつ？></p> <p>13 複雑化 いやあ…明確な自分の趣味があるのは、中学校？小学校高学年位で。</p> <p>14 評価 なので、そこからあまり興味がなくなつた。<そうかそうか…あまり興味がなくなつて。他に楽しいことがあるだろうっていう感じ。>そうですね。小5,小6のころに、スポーツをやり始めて、そこらあたりから絵とか小説とか書き始めて。</p> <p>15 解決 <色々楽しいからそんな瘡蓋むいて楽しんでるより。>そうですね。</p>
--

Aさんは「ああ…」(5行目),「何か…」(12行目),「いやあ…」(13行目)などと考えつつ、**評価**で自分の内面を示して**解決**で止めた理由を語っている。Aさんは「特に」(**評価**, 11行目)と強調することで、現在は行為を止めていることを現わしている。

(2) 語りの再構築と自傷行為に対する意味付け

Aさんの瘡蓋取りには父親の日焼け後の皮むきが

面白かったことが影響している。母親から瘡蓋取りを叱責され、行為が許容されないと自覚したがさほど気にはしなかった。小学校高学年から趣味が増えて瘡蓋取りを止めた。

Aさんの瘡蓋取りが趣味と比較可能であったことには、皮むきを楽しんだ経験が影響している。瘡蓋取りは趣味と同様その場での慰安をもたらす機能をもつ。Aさんは母親の叱責を意識し(方向性, 1行目), 行為を母親が禁止するものと評価する。

3 Bさんのナラティブ

Bさんの自傷行為は頭皮の掻きむしりと腕の引っ掻きで、その開始と休止が語られた。

(1) トランスクリプトと分析

表5 トランスクリプトⅢ

方向性	<似てる感じでした？かきむしっている時とか、引っ掻いているときとか。>
1 複雑化	気持ちは同じだったんですけども、髪の毛の方が、汚いっていうか
2	ふけが出るっていうんで、すぐに止めました。<そうなんだ。それは誰かに指摘さ
3	れたとかじゃなくて、自分で気づいた感じ？>いや、指摘されました。<親？先生？
4	>まあ、親と友達。クラスメートだったです。<人前でもやっちゃってた感じでは
5	た？>ああはい。
6 評価	<当時は人前でやったりしてたのね。どんな気持ちがあった？>その時は心配
7	して欲しいという気持ちがありましたね。<心配してくれてる感じだった？>
8 解決	心配されたことはなかったの。

Bさんは聴き手から促されて評価しており(6～7行目), 頭皮の掻きむしりを積極的には語りたくなかった可能性がある。他方「心配されたことはなかったの。」と言い切っており(解決, 8行目), 行為による援助要請は切実なものだったと思われる。

表6 トランスクリプトⅣ

9 方向性	というかまあ、(腕を)引掻くのを止めたことに関しては、やっぱりあの…
10	まあ、ちょっとあの、スゴイ難しいんですけど、あの、年齢が上がったっていう。<高校生になったから止めとかなないとみたいな？キャパが広がったとか？>
11 複雑化	ていうかあのう…腕に関しては、一時期だったので。<受験直前？>
12 評価	通い始めたころは、空気がピリピリしてるとかで。<中学校の？塾の？>
13	両方ですね。<通い始めたって、中学校に？>うーん、中学校の環境にもあまり慣
14	れてなくて。あんまり好きじゃなかったの
15	で、学校自体も…<そうか、空気のピ
16	リピリに堪えかねて。空気には慣れたから大丈夫って感じだったのかな？>
17 解決	でも慣れはしなかったの。<慣れはしなかったか。ピリピリ感を引掻いて紛らわしていたのかな…親御さんに心配して欲しかったとか、ターゲットは何かあ
18	りましたか？>やっぱり、まあ、大人だったと思います。親とか、先生とか。

Bさんは解決の語尾を「ので」と理由を示して説得的に語っており(8行目, 16行目), 自分の考えを整理できていると考えられる。また, Bさんは「あの」を連用しながら(9～11行目), 聴き手の促しがなくても「空気がピリピリしてるとかで」(評価, 12行目), 「でも慣れはしなかったの」(解決, 16行目)と結論付けている。もしかしたら, トランスクリプトⅢの時点では緊張からか自分の考えを自由に語る余裕がなく, トランスクリプトⅣの時点では語る余裕が生じたのかもしれない。もっとも, 頭皮の引っ掻きは「汚い」ため(複雑化, 1行目), 語ることを躊躇した可能性がある。Aさんとは異なりBさんは, 親と大人を並列に扱っており(解決, 17行目), Bさんには, 親に限らず頼りになる大人に助けて欲しい気持ちがあったと推察する。

(2) 語りの再構築と自傷行為に対する意味付け

Bさんは心配されたことがなかったため、大人に心配して欲しくて頭皮を掻きむしった。これにより親等の関心を得たが、フケが出るなどと指摘され、自分でも汚いと思い、掻きむしりを止めた。空気がピリピリしていたので学校や塾が嫌いで環境に慣れなかった。大人に心配して欲しい気持ちもあって腕を引っ掻いていたが、年齢が上がるとこれも止めた。

Bさんは援助要請のため自傷行為に及んだが、環境からの負荷も理由として挙げており(学校等の「空気がピリピリしているとかで」, 評価, 12行目), 行為にはストレス解消目的もあったと考えられる。腕の引っ掻きに対しては「年齢が上がったっていう。」と明言して(方向性, 10行目), 年齢が上がると共にやらなくなった行為と評価している。

4 Cさんのナラティブ

Cさんの自傷行為は皮むきであり、一旦は休止したが再開したことが語られた。

(1) トランスクリプトと分析

表7 トランスクリプトV

1	要約 (皮膚は元に戻) 戻るけど…うーん…でもなあ…でも、確かにやらなかった時
2	もあるんだろうなあ…でも、そのやっちゃうっていうのも、でも、その1回むいち
3	ゃうのが、一時期収まるきっかけが、最初の時期がですかね、そのきっかけが、で
4	すね、それがお母さんですね。お母さんがそういう風に、こう、「爪切りで切れ」と
5	か、そういうので叱るから。それで自分でもやっちゃいけないんだと思って収まっ
6	た。それなりに。けど、自分というものが出て来て、やっちゃうようになったのか
7	もしれない。<なるほどね。お母さんがこう言ったからじゃなくて。>
8	方向性 「もういいじゃん。爪切りだったら自分で切れるし。」ってなったから、自
9	分でやっちゃってたかもしれない。<幼稚園の時はお母様が切って下さってた?>
10	複雑化 ああ、初めはお母さんですね。爪と

か切ってくれてた時は、お母さん。

- 11 **評価** <うれしかったりした?>いやあ、すごい怖いとか思いましたね。逆に怖い
- 12 と思いました。<そっかそっか。>
- 13 **複雑化** しかも言うから。「爪切りって意外と切れるんだよ」とか言うから。<切れ
- 14 るね。>「血出ちゃったりするから」とか言うから。<小さい子は特にね。>
- 15 **評価** 切られるのも嫌じゃなかったですか? <それはもう。>ですよね。この感じ
- 16 が嫌だってあるから。それは嫌だったと思いますよ、だから。<あー。むいちゃっ
- 17 たら、お母さんがまた爪切り持ってきて追っかけてきて。>ですなあ…だから。
- 18 **解決** <自分で切れるようになったら、だから。>平気かな。

Cさんは要約の形で母親が皮むきを禁じたことと自立との関係を明示する。そして、「やっちゃうようになったのかもしれない。」と少し俯瞰して語ることで(要約, 6~7行目), 母親と自分との関係を客観視する。しかし、「ああ」と反応した後は(複雑化, 10行目), 「嫌じゃなかったですか?」と問い返して聴き手を語りに参加させ(評価, 15行目), 「だから」を繰り返して聴き手を説得している(評価, 16~17行目)。Cさんは、聴き手を語りに参加させてその承認を得ることにより、ストーリーの合理性を確認したと思われる。

表8 トランスクリプトVI

19	要約 だから、そういう顎関節症とかもあって、ストレスっていうのは、そういう
20	体に出ちゃうんだっていうのに気付くようになったんだと思います。<顎関節症
21	になったこともあってストレスって体に出たりするんだっていうのに気付いて…>
22	評価 うーん…すぐにそれが出たっていうわけじゃなくて、浪人の時にそういえば
23	それをやってたっていうのが、(予備校の)先生に「ストレス感じるのは仕方がない

- 24 けどそれを体に出しちゃ負けだよ」と言われてから、自分のそういう、皮むいち
- 25 やったりしていることが、もしかしたらストレスがかかっている時にやっちゃって
- 26 ることなのかなって気付くきっかけと言うか、その言葉が大きかったですね。<なるほど…あなたの中で、ストレスがかかっている時の指標になっているから…>
- 27 そうですね。<止めるんじゃなくてストレスがかかっているとそういう感じで…>
- 28 **解決** しょうがないからって感じで。<許してあげようっていう？>はい。<しょう
- 29 がないから許してあげようって、そういう感じに。>はい。<なるほど…>
- 30 **結び** 顎関節症とかになって、先生とかに言われてなかったら、気づいてなかった
- 31 かもしれないですね。何でむいちゃってるのか、とか。

Cさんは冒頭の要約で主題がストレスであることを示すと共に、「なったんだと思います」（要約, 20行目）、「言葉が大きかったですね」（評価, 26行目）と言い切っており、ストレスと皮むきの関係性のストーリーには自信があると思われる。他方、「気づいてなかったかもしれないですね。」と問いかける形で語りを終わらせており（結び, 30～31行目）、Cさんはストーリーの合理性については、それほど自信を持っていないと推察する。

(2) 語りの再構築と自傷行為に対する意味付け

Cさんは母親に叱責され爪切りで皮を切ってもらったことで、「やってはいけない」と皮むきを止めていた。しかし、「自分というものが出て」きたこともあり行為を再開した。顎関節症の経験や先生の言葉から、皮むきの原因がストレスであると自覚して皮むきをストレスの指標と捉え直すと共に、皮むきや自分自身を受容するようになった。

Cさんは、母親の禁止に背いて行為を再開することで（方向性, 8～9行目）、「自分というもの」を確認（自我の確認）する（方向性, 8～9行目）。それだけでなく、皮むきをストレスの指標と捉え直し（評

価, 27行目）、「しょうがないからって感じで。」行為や自分自身を受容する（解決, 28行目）。Cさんは、要約で話の見通しを示せる程度に自分のストーリーを確立しているものの、聴き手を積極的に語りへ引き込んでその承認を得ようとしており（評価, 15行目）、承認によって行為を再開した後ろめたさを緩和したと推察する。Dさんの語りは発達に伴う彼女の関心の変化を反映して、母親とのストーリー（トランスクリプトV）からストレスを恐れるストーリー（トランスクリプトVI）へと変遷している。

5 Dさんのナラティブ

Dさんの自傷行為は引掻きで行為の持続が語られた。引用外の部分から、原因不明の痒みがあること、母親は引掻きを止める薬（効果がない）を勧めたことが分かっていた。

(1) トランスクリプトと分析

表9 トランスクリプトVII

- 1 **方向性** （引掻きを）止める努力を止めたのは、ああ…分かりました！あの、大
- 2 学3年生位になって、家に帰ることが少なくなっちゃって言うか。友達とここに泊ま
- 3 ったりとか…その、家に帰るのもすごく遅かったりだとかして、何かお母さん
- 4 と会う時間がなくなったから、少なくなったから、言われなくなったから止めたっ
- 5 ていうのもあるし、家にある薬とかを、家に薬があるけど、家にあまり帰らなくな
- 6 ったから塗らなくなったっていうのもあったり…何か答えになってない…
- 7 **評価** <環境の変化があったってことかなあ…>ああ、はい。<もちろん、あなた自身の心境の変化があるんだとは思いますが、薬やお母さんとのアクセスが遠くな
- 8 り、もういいじゃないって離れてった？>うんうん。<じゃ結構、引掻きとお
- 9 母さんってつながってる？>あー。つながってますね、かなり。<そうかあ…>
- 10 **方向性** 何か、色々止めることをしてきて…

物理的に何か、これを止めるっていう、
 11 薬を塗るって言う面倒くささもなくなったんですけど…お母さんも何か言わなくな
 12 った?? うーん、ちょっと違うなあー。<お父さんとかは何か言う?>ないですね。
 13 <彼氏は?>彼氏も言いますね。「止めなよ」って言いますね。
 14 評価 でも、あまり私には響いてない。お母さんの方が強いですね。<お母さんの
 15 方が強く響くんだ。お母さんの方が辛い。>はい、はい。<お母さんは今は?>
 16 解決 今も、言う。でも、対処的なこと言うのは止めましたね。

Dさんは「何か答えになってない…」(方向性, 6行目), 「ちょっと違うなー」(方向性, 12行目)と自問自答しつつ, 聴き手の言葉に「うんうんうん」(評価, 8行目), 「はい, はい」(評価, 15行目)と相槌を打って会話を促進しており, 語りながら考えを整理していると思われる。他方母親との関係のストーリーについては, 引っ掻きと母親が「つながってますね, かなり」(評価, 9行目), 「お母さんの方が強い」(評価, 14行目)と断言しており, この点には自信があると思われる。

表 10 トランスクリプトⅧ

17 方向性 お母さんに「止めなよ」って言われると, 「うるさいなあ」って思うんです
 18 けど, 友達に「止めなよ」って言われると, 別に嫌じゃないなっていうか。何でだ
 19 ろう。
 20 評価 お母さんはうるさいですよー。友達に言われるのは別にね。「止めたいと
 21 思ってるんだけど, 止められないんだよね, ははっ」みたいな。<お母さんにそれ
 22 は言えない?>「ははっ」っていうのは抜きで, 「止めたいと思ってるよ, こっちだっ
 23 て」<怒りっていう。>「わかってるよ, それは」っていう。<そっか。何でだろ

24 う。お母さんに言われるとちょっとイラっとする?>お母さんに言われる…何か,
 25 友達に言うのと, そこまで悪いことじゃないっていう気がしてくるっていうか。何か,
 26 緩いから。ふふ。何か, お母さんだと, 「ダメッ! 止めなさい!」って凄いなって
 27 るけど, 友達は緩くて「止めなよー」みたいな感じで, 緩いから。だから, 「そこま
 28 で悪いとは思っていないかな?」って。<彼氏はどう?>彼氏は緩く「止めなよ」
 29 って言うんですけど…<彼氏さんは友達と同じ, それともまた別ですか?>また別
 30 ですかね。友達ともお母さんともまた, ちがくて。緩く, 「もう止めなよ」って言う
 31 んですけど…なんだろう, さらっと流れるって言うか…<聞かなくて大丈夫かな?>
 32 そうですね。聞かなくて大丈夫かな。<友達だと聞こうかなっていうのがある?>
 33 いや…う…ないですね。同じ位軽いんですけど。友達の方が, まだ聞く気が…<友
 34 達だと「またやっちゃった」とか軽く報告してしまったりとかして。>
 35 解決 うんうん。何か, お母さんが強く禁止するのを, 友達に言うとその禁止がち
 36 ょっと, 緩むというか。ふふふ。<なんだろうねそれ。お母さんの重みを軽くして
 37 るんだよね, 薄めてるっていうか。>そうですね, 薄めてますね。<本当は行為薄
 38 まってないんだけど。>薄まってないですね。

Dさんは「『ははっ』みたいな」(評価, 21行目), 「ふふ。」(評価, 26行目), 「ふふふ。」(解決, 36行目)と笑いながら語る。Aさんも笑いをういており(トランスクリプトⅠ, 評価, 4行目), 2人は母親の禁止に背く罪悪感を笑いで緩和したと推察する。

(2) 語りの再構築と自傷行為に対する意味付け

Dさんは当初, 母親の禁止や助言に従って引っ掻きを予防する薬を塗布していたが, 成長に伴い母親と物理的・心理的に距離を置き始めて薬の塗布を止めた。母親も対処を勧めなくなった。Dさんには引っ

搔きを止めたい気持ちがある。他の誰の言葉よりも母親の言葉が響くため、母親が禁止する引っ搔きは母親とかなりつながっていると感じている。

Dさんは、痒みに対処するために引っ搔いている。Dさんは母親を強く意識するため（評価, 14行目等）、母親の禁止には相当大きな影響力があると推察する。Dさんは、引っ搔きを止められずに葛藤しており（評価, 22～23行目）、母親の叱責がこの葛藤を増悪して新たな行為を誘発している可能性がある。Dさんは自立を志向して母親と距離を取ろうとするが（方向性, 2～6行目）、母親が強く干渉してくるため（『ダメッ！止めなさい！』って凄い言」う、評価, 26行目）、これに応酬して親子がつながってしまう（評価, 20～23行目）。それでもDさんは、Cさんのように自傷行為を自我の確認とは意味付けていない。

IV 総合考察

軽度の自傷行為の手段としての意味（機能）と意味付け 本研究では4個の機能と6個の意味付けが見出された。機能については、先行研究（Klonsky, 2007前出；Taylor et al., 2018前出）と同様、「ポジティブな状態の導入」（趣味と類似した楽しみ, Aさん）、「対人操作」（援助要請, Bさん）、「ストレス発散」（ストレス解消, B, Cさん）、「感覚探求」（痒みへの対処, Dさん）が同定された。それ以外の意味付けとしては、母親が禁止する行為（A, C, Dさん）、年齢と共にやらなくなった行為（Bさん）、自我の確認（Cさん）、ストレスの指標（Cさん）、自分でも止めたい行為（Dさん）、母親とのつながり（Dさん）が意味として浮かび上がってきた。「母親が禁止する行為」と「母親とのつながり」は次項で述べるが、こうした意味付けから、軽度の自傷行為は、日常的なストレスの発見に利用できること（「ストレスの指標」）、軽度の行為は自然に消滅しうること（「年齢と共にやらなくなった行為」）が示唆される。他方、「自分でも止めたい行為」は、行為の種類を問わない可能性がある。もっとも、軽度の行為は重い行為よりも他者に語り易いと推察できることから、軽度の行為者は他者に対して率直に「止

めたい」ことを語るができると思われる。

他の自傷行為の意味付けと比較すると、「自己の内面を見つめることによる自己の再統合の試み」（Rosenthal et al., 1972前出）と今回の「自我の確認」は自己の内面を見つめる点で関連しているが、軽度の場合には「自己の再統合」が生じるほど大きな効果は生じないと推察する。また、砂谷（2012前出）は自傷行為を「やめることができない大切なもの」とするが、今回は「自分でも止めたい行為」としているため、行為者は軽度の場合には行為に対する制御感をやや強く持つと思われる。背景要因について本研究の協力者は、虐待（Walsh & Rosen, 1988/2005前出）や、いじめ（Wadman et al., 2018前出）は語らなかった。軽度の自傷行為は、このような体験がなくても、日常的な行為から派生することも多いと考えられる。

対人関係が自傷行為の意味付けや行為の持続に及ぼす影響 今回の結果では、親密な関係性のなかでも母親との関係だけが行為の意味付けの中に現れた。意味付けを伴うストーリーを参照すると、A, C, Dさんは自傷行為を「母親が禁止する行為」とする。Aさんは、母親の禁止により初めて瘡蓋取りを許されない行為（自傷行為）と認識した。軽度の行為は侵襲性が低く手軽にできるため、行為者は母親のような親密な者の否定的な視線を経て、軽度の行為を「自傷行為」と自覚すると推察する。しかし、これら3名はそうした母親の否定的視線に従わずに行為を持続している。このように母親の否定的な視点に対抗することは、青年期における自立志向の現れ（白井, 2013前出）かもしれない。現にCさんは、母親の禁止に背いて行為を持続することを「自我の確認」と意味付ける。同じく自傷行為を持続するDさんは、自立を志向して母親と距離を取ろうとするものの行為を止められず、母親の叱責に応酬して二人の距離を縮めている。そのためDさんは、母親が叱責により彼女をつなぎとめようとしていると解釈し（「母親とのつながり」）、行為の持続により母に抗っていると思われる。つまり、子どもが自立を志向する場合には、母親の行為の禁止は子どもの自立を阻む標的として解釈されるため、行為の持続は自立の象徴としての意味を持ちうる。Wadmanら（2018

前出)は、親の激しい怒りの表出は子どもの自傷行為の休止には役立つとしているが、怒りには至らない批判的な態度も同様と考えられる (Baetens, Claes, Hasking, Smits, Grietens, Onghena & Martin, 2015)。

一方、自傷行為を休止したBさんは、親が行為を「叱責」ではなく「指摘」したとする (トランスクリプトⅢ, 3～4行目)。Bさんは親等に「援助要請」をしていたことから、親の態度は子どもへの応答と解釈されて、行為の休止につながったと考えられる。これは、親の情緒的サポートがそうした機能をもつと同様である (Wadman et al., 2018 前出)。

意味付けからみた自傷行為とストレスとの関係性
「ストレス解消」という意味付けが複数の人にみられたため (B, Cさん)、彼女らのストーリーから自傷行為とストレスとの関係性を考えてみたい。ストレスの原因としてBさんは学校等の「空気がピリピリしてる」こと (トランスクリプトⅣ, 12行目)、Cさんは大学受験を挙げたが (トランスクリプトⅥ, 22～26行目)、個人の努力だけではこれらの原因は除去できない。そのため、感じたストレスを自傷行為で紛らわしたと考えられる。先行研究でもストレス発散を機能の一つに挙げているため (Taylor et al., 2018 前出)、このような関係は軽度に限らず自傷行為一般にみられる可能性があると考えられる。

臨床実践への示唆 援助者は、軽度の自傷行為の意味付けを知ることで、各行為者に適した援助方法へのヒントが得られるかもしれない。Aさんが自傷行為の果たしている機能を趣味で置き換えたように、臨床家は代替行為を提案できる (松本, 2015 前出)。また、機能以外の意味付けに対しては、その具体的な内容を知り、臨床家はその意味を別の方向から満たしていくことができる。例えば、自傷行為に自立を象徴する意味付けがなされる場合 (Cさんの「自我の確認」)、面談を通じて行為者が意志や行動について自分なりの軸を作ることを援助できる。時間の経過と共に意味付けは変化しうるため (Cさんは「自我の確認」→「ストレスの指標」)、行為者のストーリーを聴く際にはその人がどの時点でどのような意味付けを与えたのかを具体的に知る必要がある。そして、(母)親など周囲の者に、「自分でも

止めたい行為」(Dさん)であるかもしれない旨説明し、行為者を過度に批判しないよう伝えることができると考えられる。

(母)親など周囲の者は、臨床家に協力するだけでなく、例えば行為にストレス解消の意味がある場合には行為者の環境を調整してストレスの原因を解消することができる。また、(母)親としては、子どもの援助要請に応じるだけでなく、発達に伴い行為が自立の象徴としての意味付けを持ちうることを理解して、叱責などを通じて子どもに過度に干渉するのではなく、親子間の距離感を保つよう心掛けることが行為の休止に役立つと推察する。

V 本研究の意義と今後の課題

本研究の結果、自傷行為には対人関係や発達過程などの個人的な経験を反映した意味付けがなされており、意味付けを知るには行為者のストーリーを知ることが必要と思われた。発達の過程から子どもが親の態度を、自立を阻むものと解釈する場合には、行為に自立の象徴としての意味付けがなされて行為が持続する場合があると推察した。本研究は通院経験のない女性の行為者を対象としているため、通院経験がある者には結果が当てはまらない可能性がある。男性の語りの分析や援助方法の実証も含め今後更なる研究が必要である。

謝辞

本稿作成にあたり調査に協力頂いた方々に感謝申し上げます。分析・執筆を通じてご指導下さった東京大学大学院教育学研究科の能智正博先生に深くお礼を申し上げます。

引用文献

- Baetens, I., Claes, L., Hasking, P., Smits, D., Grietens, H., Onghena, P., & Martin, G. (2015). The relationship between parental expressed emotions and non-suicidal self-injury: The mediating roles of self-criticism and depression. *Journal of Child and family studies*, 24 (2), 491-498.

- Favazza, A. R. (1996). *Bodies under siege: Self-mutilation and body modification in culture and psychiatry, 2nd ed.* Baltimore, Md.: The Johns Hopkins University Press. (松本俊彦 (訳) (2009) 自傷の文化精神医学: 包囲された身体 金剛出版)
- Gibbs, G.R. (2017). *Analyzing qualitative data(Book 6 of The SAGE Qualitative Research kit, 2nd ed.)*. London: SAGE. (砂上史子・一柳智紀・一柳梢 (訳) (2017) 質的データの分析 (SAGE 質的研究キット 6) 新曜社)
- Hawton, K., Rodham, K., & Evans, E. (2006). *By their own young hand: Deliberate self-harm and suicidal ideas in adolescents*. London: Jessica Kingsley Publishers. (松本俊彦・河西千秋 (訳) (2008) 自殺と自傷: 思春期における予防と介入の手引き 金剛出版)
- Klonsky, E. D. (2007). The functions of deliberate self-injury: A review of the evidence. *Clinical Psychology Review, 27*, 226-239.
- Klonsky, E. D., & Muehlenkamp, J. J. (2007). Self-injury: A research review for the practitioner. *Journal of clinical psychology, 63 (11)*, 1045-1056.
- Labov, W. (2013). *The language of life and death: The transformation of experience in oral narrative*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Labov, W., & Waletzky, J. (1997). Narrative analysis: Oral version of personal experience. *Journal of narrative and life history, 7 (1-4)*, 3-38.
- Lloyd-Richardson, E., Perrine, N., Dierker, L., & Kelly, M. (2007). Characteristics and functions of non-suicidal self-injury in a community sample of adolescents. *Psychological Medicine, 37*, 1183-1192.
- 松本俊彦. (2015). 自分を傷つけずにはいられない: 自傷から回復するためのヒント. 講談社.
- 能智正博. (2011). 質的研究法. 東京大学出版会.
- 岡田斉. (2010). 自傷行為に関する質問紙作成の試みⅣ: 行動抑制・行動賦活と自傷行為の頻度の関連性の検討. *人間科学研究, 32*, 73-78.
- Pattison, E. M., & Kahan, J. (1983). The deliberate self-harm syndrome. *American Journal of Psychiatry, 140*, 867-872.
- Riessman, C. K. (1989). Life events, meaning and narrative: The case of infidelity and divorce. *Social Science and Medical, 29 (6)*, 743-751.
- Rosenthal, R. J., Rinzler, C., Walsh, R., & Klausner, E. (1972). Wrist-cutting syndrome: The meaning of a gesture. *American Journal of Psychiatry, 128 (11)*, 47-52.
- 白井利明. (2013). 青年期. 無藤隆・子安増生 (編), 発達心理学Ⅱ (pp.1-40). 東京大学出版会.
- 砂谷有里. (2012). 自傷行為の経験をもつ7名の20代女性の語り: 自傷を始める・やめる契機と行為の意味付けに関する語りの定性的検討. *こころの科学, 27 (1)*, 62-71.
- Taylor, P. J., Jomar, K., Dhingra, K., Forrester, R., Shahmalak, U., & Dickson, J. M. (2018). A meta-analysis of the prevalence of different function of non-suicidal self-injury. *Journal of Affective Disorders, 227*, 759-769.
- Wadman, R., Vostanis, P., Sayal, K., Majumder, P., Harroe, C., Clarke, D., Armstrong, M., & Townsend, E. (2018). An interpretative phenomenological analysis of young people's self-harm in the context of interpersonal stressors and supports: Parents, peers, and clinical services. *Social Science & Medicine, 212*, 120-128.
- Walsh, B.W., & Rosen, P.M. (2005). 自傷行為: 実証的研究と治療方針 (松本俊彦・山口亜希子, 訳). 東京: 金剛出版. (Walsh, B.W., & Rosen, P.M. (1988). *Self-mutilation: Theory, research, and treatment*. New York: The Guilford Press, A division of Guilford Publications, Inc.)
- 山口亜希子・松本俊彦・近藤知津恵・小田原俊成・竹内直樹・小阪憲司・澤田元. (2004). 大学生の自傷行為の経験率—自記式質問票による調査. *精神医学, 46*, 473-479.

(2020. 1. 24 受稿) (2020. 10. 6 受理)
(ホームページ掲載 2020年10月)